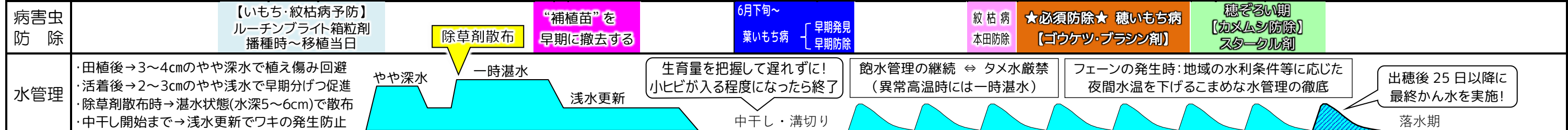
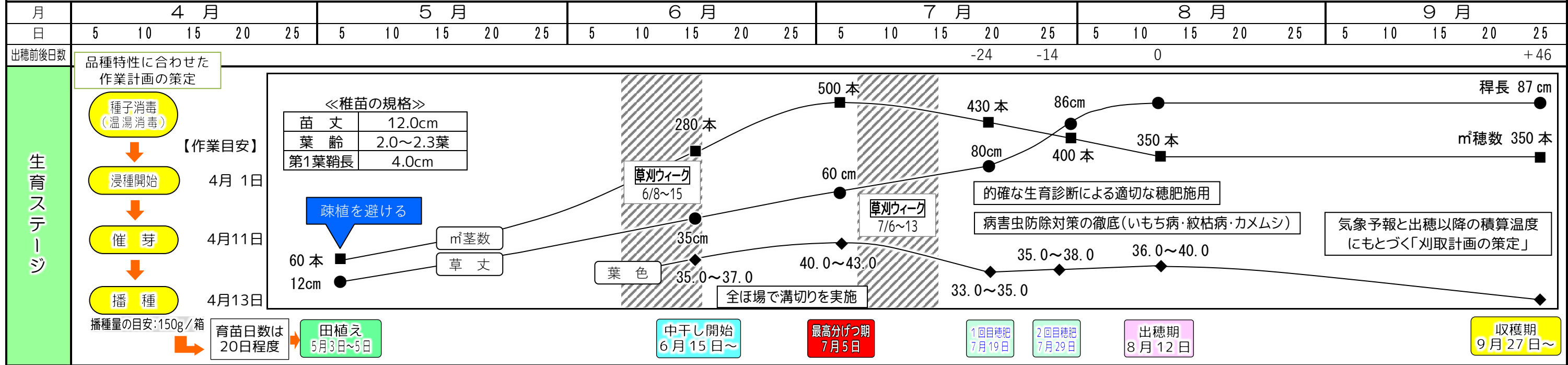


# JAえちご中越 さんとう地域「あきだわら」栽培暦

あきだわら・にじのきらめき生産者部会



**栽培管理のポイント**

**Point 1**

~適正な作業計画の策定により健苗を育成します~

- 移植期にあわせた適期播種、適正な播種量、育苗期間20日程度で健苗を育成する
- 土壌診断結果にもとづく土づくり資材(有機質・ケイ酸)の施用
- 作土深15cm確保~ほ場条件に応じた適正量の基肥施用→基肥N施肥量のめやす**5.6~7.0kg/10a** 極端な多肥栽培を避ける

**Point 2**

~適期田植えて初期生育を確保します~

- 移植前追肥(べんとう肥)の施用→活着・初期生育の促進
- 田植期は、**5月3日~5日**
  - 栽植密度: 60株以上/坪
  - 植付本数: 3~4本/株
  - 過度な疎植を避ける(収量減)
  - 植付深さ: 2~3cmの浅植え
- いもち病の発生しやすい地域・ほ場では予防防除(箱施用剤)を徹底→補植苗を速やかに撤去

**Point 3**

~生育状況にあわせた生育調節で過剰生育を抑制します~

- 目標穂数の80%: 茎数280本/m<sup>2</sup>以上=1株あたり16本を確保してから→適期中干し開始
- 全ほ場で溝切り(10条: 3mに1本) 速やかなかん水・排水管理
- 本格的な梅雨入り前にしっかり地固め→中干しは小ヒビが入る程度になったら終了~遅くとも出穂30日前までに飽水管理へ移行

**Point 4**

~病害虫防除と水管理の徹底で稲体機能を維持します~

- いもち病・紋枯病の早期発見~早期防除(こまめにほ場巡回)
- 中干し以降は、田面が強く乾くことのないよう飽水管理を継続(強い中干し・タメ水→厳禁)
- 出穂後25日以降に最終かん水を入水(落水は出穂28日以降)異常高温時: 速やかに一時湛水~高温障害を防止

**Point 5**

~適切な生育診断による穂肥施用・品質・収量を確保します~

- 穂肥は出穂25~23日前(幼穂形成期)と14日前の2回に分けて施用→施肥量は、1回あたり2.5~3.5kg/10aをめやすとし合計**5.0~7.0kg/10a**をめやすとする
- 穂肥施用時の生育めやすを大幅に超える場合は、施肥量を控える
- 出穂期の葉色が「SPAD値で36」を下回らないよう2回目穂肥は確実に施用する

**Point 6**

~適期刈取、適切な作業により高品質米に仕上げます~

- 出穂後の積算気温: 1050°C~1100°Cを参考に籾の黄化率(85~90%)を確認して適期に収穫する
- 胴割粒の発生防止: 適正な乾燥温度・速度で急激に乾燥させない→高品質米仕上げ
- 収穫後は早めに土づくり資材の投入+稲わらの秋すき込み

《施肥のめやす》 (成分 kg/10a)				《生育のめやす》				《品質向上・収量確保目標》		《品種特性》					
区分	時期	N成分	備考	生育ステージ	時期	草丈(cm)	茎数(本/m <sup>2</sup> )	葉色(SPAD)	玄米1等級比率	90%以上	早晩生	耐倒伏性	葉いもち	穂いもち	紋枯病
土づくり	収穫後	-	稲わら秋すき込み 有機質・けい酸資材	1回目穂肥	7/19	80	430	33~35	10a当たり収量	720kg	晩生	やや強	弱	やや弱	やや弱
基肥	~田植え	5.6~7.0kg	地力に応じて	2回目穂肥	7/29	85	400	35~38	《収量構成要素》						
穂肥1	出穂23日前	2.5~3.5kg	遅れずに施肥~籾数確保	出穂期	8/12	87(稈長)	330~350(穂数)	36~40	収量(kg/10a)	1穂籾数(粒)	穂数(本/m <sup>2</sup> )	m <sup>2</sup> 籾数(百粒)	登熟歩合(%)	千粒重(g)	
穂肥2	出穂14日前	2.5~3.5kg	しっかり施肥~登熟向上						720	103	350	360	90%	22.2	
合計	-	10.6~14.0kg	*一発基肥 トータルN: 120~135kg												